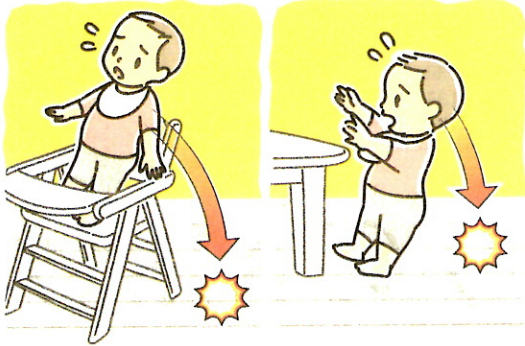


起こりやすい転倒のケース



2歳ごろまでの乳幼児は体に対して頭が大きいいため、バランスを崩して転びやすい。特に、つかまり立ちからの転倒は多くの子どもが体験しており、「家庭内で日常的に起こること」と軽視されがちだ。しかし、後頭部を床に強打するなどして重症化するケースもある。専門家は育児スタート期の保護者に注意を呼び掛けている。(今川綾音)

つかまり立ちで転倒

後頭部を強打 重症化も

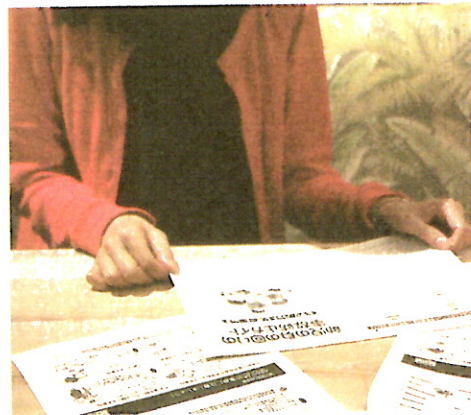
昨年六月、東京都内のある家庭で起こった出来事だ。台所で妻「当時(三〇)」が夕食の調理を終え、夫「同(三〇)」が配膳をしようとして、リビングのテーブルでつかまり立ちしていた生後十カ月の長男のそばを離れた時だった。ゴンツ。鈍い音とともに、長男がマットを敷いたフローリングの床に倒れ、後頭部を打った。

急性硬膜下血腫に

大泣きした後、目線が合わなくなり、手足を突っ張らせてけいれんし始めたため、夫婦は救急車を要請。長男は搬送中の車内と病院で三回嘔吐し、コンピュータ断層撮影(CT)で急性硬膜下血腫と診断された。手術が可能な病院に転院後、眼底出血と頭蓋骨のひびも判明した。

長男は事故の二日前につかまり立ちを始めたばかりで、この日の朝も一度転倒

「つかまり立ちからの転倒について注意喚起が足りていない」と話す母親＝東京都内で



し、後頭部を打っていた。その後、大きな後遺症の心配もなく、一週間ほどで退院でき、今は二歳になって元気に過ごしている。

子どもの頭部損傷に詳しい「竹の塚脳神経リハビリテーション病院」(東京)の小児脳神経外科医、西本博さん(三〇)は「家庭内の頭のけがは二歳以下の子に起こりやすく、赤ちゃんがつかまり立ちを始める生後六〜十カ月がピーク」と話す。乳幼児は体全体に比べて頭部が大きく、支える足

軽視禁物 生後6~10ヵ月に多発

腰の筋力も未発達のため、転びやすいという。

西本さんは、二〇〇二年までの十年間に家庭内で急性硬膜下血腫となった生後六〜十七カ月の二十五人を診療し、五年以上にわたり経過観察をした。その乳幼児の七割以上は後方に転倒・転落したことが原因で、全体の64%がつかまり立ちからの転倒、28%が高さ百二十センチ以下からの転落だった。多くは後遺症が見られなかったが、約一割の子には軽度の発達遅れや運動まひが残った。

繰り返しに注意を

家庭で気を付けたいことは「できるだけ、子どものそばを離れないこと」と西本さん。複数の大人がいると油断しやすいが、子どもから離れるときは声を掛け合うことが大事だ。一人で世話中は、ヘルト付きの乳幼児用いすに座らせるなど

してから離れる。「転倒や転落を完全に防ぐのは難しい。年齢が低いほどダメージが残しやすいので、頭を打った場合は二度、三度と繰り返し返さないようにして」と注意を促す。

赤ちゃん用のヘッドギアやリュック型のクッションなど、転倒時の衝撃を和らげるための育児グッズもあるが、効果は限定的だ。「頭蓋骨の骨折を防ぐことはできるかもしれないが、衝撃により頭蓋内で脳が大きく動くのは防げず、硬膜下血腫は起こり得る」

冒頭の母親は「つかまり立ち期の転倒がこんなに重大な結果になるとは知らなかった。事故の前を知っていたらもっと注意できたのに」と振り返る。母子保健分野に詳しく、保健師としての経験も豊富な香川大医学部准教授の辻京子さん(五三)は「育児スタート期の保護者に、子どもが転倒して頭を打つことのリスクを広く伝える必要がある」と指摘。母子手帳への記載や、全員が対象の乳児健診などでの啓発の徹底を訴える。